吉行淳之介作『驟雨』と独訳“Regenschauer”
——文の接続の問題をめぐって——

石井敬子

I　はじめに

日本の小説のドイツ語訳を読む時、日本語の一つのセンテンスが、ドイツ語では二つないしそれ以上のセンテンスに切り離されて訳されていることがよくある。「原文に忠実に」という翻訳の原則に立って考えてみると、（この翻訳論についてはいろいろ論議されているようだが、別の機会に譲ることにして）、「何故切り離されるのだろうか」という素朴な疑念が頭をもたげてくる。もちろん日本語とドイツ語の関係に限らず、「言語学的に全く系統を異にする二つの国の文章の間には、永久に踰ゆべからざる垣がある」注1）以上、日本文の形態をそっくりそのまま独文に移し換えることは不可能、もしくはきわめて困難な作業だと言わねばなるまい。その困難さを克服すべく、訳者があらゆる努力を試みたとしても、結果的には「切り離す」行為が行われているのは何故か。恐らく、あえて独訳を断行したとしても、独文として見た場合、きわめて不自然な代物になるからに違いない。それはひょっとしたら、日本語や日本文の構造に原因が潜んでいるのかもしれない。そこで、日本文と独文との比較対照により、その原因、ひいては日本語・日本文の特徴の一端を探ってみようというのが、小稿の目的である。

今回取り上げたのは、吉行淳之介の短編小説『驟雨』注2）と独訳“Regen-schauer”、注3）それに参考資料として、志賀直哉の短編『清兵衛と瓢箪』注4）と独訳“Seibei und seine Kürbisflaschen”注5）を扱った。この二つの短編を扱うことになったのは偶然性によるものであるが、両者の文章の特徴は、谷崎の言葉を借りるならば、前者が「源氏物語派」（情緒的で、長文が多い）であり、後者が「非源氏物語派」（理性的で、短文が多い）で、比較検討するのには好都合である。ただ惜しむらくは、志賀の短編は数量的には少なすぎるので、参考資料としてあげることにしたい。

ここで、何故小説を選んだか、という問題について触れておきたい。小説というのは実用的な文章と違い、文章の醸し出す情感もしくは余韻、それにリズム感

などを大切にするものである。この、言わば「＋α（プラス・アルファ）」とでも名付くべきものは、解釈の上で読み手にある程度の許容範囲を与えるものであって、翻訳の際にも、当然訳者の判断にゆだねる機会は多くなるわけである。この訳者の判断がどう下されているか、これが興味深い点である。同一の作品に対し、少なくとも三種類の独訳の比較対照が出来れば理想的であるが、それは望むべくもないことなので、断念せざるをえない。ただし、ここで扱った二編の独訳は、単独の訳者によるものではなく、『驟雨』の場合五人の共訳、『清兵衛と瓢箪』の場合二人の共訳によるので、まずまず妥当な、最大公約数的独訳がなされているものと見てよいだろう。

Ⅱ　分析の内訳

『驟雨』において独訳の際切り離されたセンテンスは４３例、全センテンス３９８に対する比率は１０.８％となっている。『清兵衛と瓢箪』では、１０１センテンスに対し１０例で、９.９％の比率を示している。

それでは、日本語のセンテンスのどの部分で切り離されているかを調べてみると、次のような内訳になった。

＜『驟雨』４３例中＞

１位	接続助詞「て」	９例
１位	接続助詞「が」	９例
３位	動詞の連用形中止法	７例
４位	断定の助動詞「だ」の連用形「で」	３例
５位	「と」（接続助詞）	２例
	「ので」（接続助詞）	２例
	「とき」（名　詞）	２例
８位	「ながら」（接続助詞）	１例
	「から」（接続助詞）	１例
	「し」（接続助詞）	１例
	「を」（格 助 詞）	１例
	「は」（格 助 詞）	１例

その他　　4 例

＜『清兵衛と瓢箪』１０例中＞

1位	接続助詞「て」	3 例
2位	接続助詞「が」	2 例
2位	断定の助動詞「だ」の連用形「で」	2 例
4位	動詞の連用形中止法	1 例
4位	「と」（接続助詞）	1 例
4位	「から」（接続助詞）	1 例

上記の内訳から見ると、一つのセンテンスにおいて、接続助詞「て」・「が」、動詞の連用形中止法、断定の助動詞「だ」の連用形「で」の部分で切り離されている例がかなり多い。そこで上位４位までの用例を独訳と比較対照しつつ検討してみることにする。

Ⅲ　接続助詞「て」の場合 ― ９例

㈠ 上下の文節を軽く接続する例 ― ５例

ⓐ 「女は彼の視線に気付き、軽く唇を噛む
と下を向いて／　（／…切り離す印）
乱れた呼吸をととのえていたが、／
急に顔をあげると笑い声をたてた。」
（角川文庫『驟雨』― Ｐ．１８９　以後頁数のみ記す）

この場合、「女は彼の視線に気付いた。」で切り離し、「軽く唇を噛むと……乱れた呼吸をととのえていた。」まで続け、各センテンス間は適当な接続詞、又はコロン（：）、セミコロン（；）などで間隙を埋めることも出来そうである。

さて、独訳ではどうなっているか見てみよう。

Sie bemerkte seinen Blick, biss sich leicht auf die Lippe und senkte die Augen.

（彼女は彼の視線に気付き、軽く唇を噛み、そして目を伏せた。― 筆者訳）

Sie fasste sich und atmete wieder ruhiger ; dann blickte sie plötzlich auf und lachte laut. (P. 12)

(彼女は気を静め、そして再び落ち着くよう呼吸をととのえていた。それから急に顔をあげて声を立てて笑った。── 筆者訳)

ここでは、「乱れた呼吸をととのえていた」で切り離されているが、「急に顔をあげると笑い声をたてた」とをセミコロン(;)でつないでいる。セミコロンを使ったのは、女の動作の流れに連続性を持たせようとしたためである。

ⓑ 「短冊形に外の光が輝いている出口に、逆光を受けて佇んでいた女は、彼がゆっくりと昇ってくるのを待って、/

『今度お会いするまで、わたし、操を守っておくわね』と囁くと、微笑みを残して急ぎ足に去っていった。」 (P. 190)

Die Frau stand im Gegenlicht des sonnenbestrahlten Ausgangs, der die Form eines Tanzaku hatte, und wartete, während er langsam die Treppe hochstieg.

(女は短冊形の、外の光が輝いている出口の逆光を受けて佇んでいた、そして彼がゆっくりと階段を昇ってくるのを待った。── 筆者訳)

„Bis zu unserem nächsten Treffen bleibe ich keusch," flüsterte sie und eilte, ein leises Lächeln hinterlassend, davon. (P.13)

原文の「短冊形に……逆光を受けて佇んでいた」は連体修飾語として「女」にかかっているが、独訳では"Die Frau"の主語に対する述語として扱われ、und でもう一つの述語と接続させている。

ⓒ 「風呂から上って先に部屋へ戻り、窓に腰をおろして/

街の光景を見下していた彼に、道子は黙って冷たい牛乳瓶を手渡すと、/

『ね、また暫くつきあって』と言いながら、ダイスの道具を取出した。」 (P. 193)

Er kehrte als erster vom Baden ins Zimmer zurück und setzte sich auf die Fensterbank.

Während er das Strassenbild unten betrachtete, reichte ihm

Michiko schweigend eine kleine Flasche kalter Milch.

„Hör mal, leiste mir wieder ein bisschen Gesellschaft," sagte sie und holte einen Knobelbecher heraus. (P. 15)

ⓒでは三つのセンテンスに切り離されているが、その他にも可能性は考えられる。

<第一案>(彼は)風呂から上って先に部屋へ戻った。／ 窓に腰をおろして街の光景を見下していた彼に、道子は黙って冷たい牛乳瓶を手渡した。／……。

<第二案>(彼は)風呂から上って先に部屋へ戻り、窓に腰をおろして街の光景を見下していた。／ 道子は黙って(彼に)冷たい牛乳瓶を手渡すと、……。

ⓓ 「別れて、電車に乗り、座席に坐って／ 先刻の道子との会話をぼんやり反芻しながら手に持っていた運勢暦の彼自身の星を探してみた。」(P. 198)

Nachdem sie sich getrennt hatten, stieg er in die Bahn und setzte sich.

Während ihn das Gespräch mit Michiko noch beschäftigte, suchte er in dem Heft, das er noch in der Hand hielt, sein eigenes Horoskop. (P. 21)

ⓓでは、「別れて、電車に乗った。」で切り離し、「座席に坐る」行為に持続性を与え、座席におけるもう一つの行為と連繋させることも可能である。独訳では、「別れて、電車に乗り、座席に坐った。」を一連の行為としてとらえている。

ⓔ 「瞼の上が仄あたたかく明るんだ心持で、彼が眼を開くと、あたりには晩秋の日光が満ちていて、／ 朝の装いをして枕もとに端坐している道子と視線が合った。」 (P. 204)

Als er helle Wärme auf den Augenlidern spürte und sie öffnete, überflutete die morgendliche Spätherbstsonne den Raum.

Michiko, die mit ihrer Morgentoilette schon fertig war, sass aufrecht an seinem Kopfende, und ihre Blicke trafen sich. (P. 27)

ⓔでは、「あたりには晩秋の日光が満ちていて」は、言わば「挿入」の文節とも言えるもので、次の文節への関連性はそう強くない。切り離すことに対しあまり抵抗はないものと思える。

(二) 順接の確定条件を示す例

ⓐ 「そこに愛情の鮮烈さもあるだろう／が、わずらわしさが倍になることとして／それから故意に身を避けているうちに、胸のときめくという感情は彼と疎遠なものになって行った。」 (P. 180)

Darin liegt wohl auch die frische Kraft der Liebe.
Doch ihm schien es, als verdoppele sich mit der Liebe zugleich auch der Kummer.

(が、愛情と同時に又わずらわしさが倍になることと、彼には思われた。)

Daher war er ihr absichtlich solange ausgewichen, bis ihm das Herzklopfen fremd geworden war. (P. 2)

ⓐの場合、接続助詞「て」は、原因・理由などを表わす順接の確定条件になっている。

ⓑ 「指定の場所へ女が来たことが分った後も、彼の感情のたかぶりは続いていて、／女の向かい側に坐って唇を開いたが、気軽に言葉を出し兼ねた。」 (P. 183)

Obgleich er nun erkannte, dass die Frau tatsächlich zu der Verabredung gekommen war, hielt seine Erregung an.

Er nahm ihr gegenüber Platz und öffnete die Lippen, aber es gelang ihm nicht, auch nur ein belangloses Wort hervor-zubringen. (P. 6)

ⓑの場合も、原因・理由を表わす確定条件で、「彼の感情のたかぶりが続いている」ために、「気軽に言葉を出し兼ねた」のである。ⓐもⓑも、接続助詞「て」の用法がはっきりしているので、センテンスを切り離す時判断に迷うことはない。

(三) (一)と(二)の中間的用法としての例

上下の文節を軽く接続すると言うには強く、順接の確定条件と言うにはやや弱い、言わば(一)と(二)の中間的用法をここで挙げる。

ⓐ 「アッハッハ」

酔っているらしい相手の男の明け放しの笑い声が続いて、／

室内の彼の緊張は急速にとけていった。」 (P. 195)

„Aha, ha, ha!“ erscholl das betrunken klingende breite Lachen des Mannes;

im Zimmer löste sich seine Spannung schnell. (P. 17)

ここでは、センテンスを完全に切り離さないで、セミコロン(;)で続けている。「男の笑い声が続いていて」、その時間的経過に付随して「彼の緊張が急速にとけていった」のである。ⓑも同様である。

ⓑ 「街はネオンに飾られた夜とはまったく変貌して、／

娼家はすべて間口を閉ざし、化粧を落し、疲れて仮睡(まどろ)んでいる。」

(P. 196)

Das Viertel, abends in Neonlicht getaucht, zeigte sich jetzt völlig verändert;

dir Bordelle hatten ihre Türen verschlossen, sich abgeschminkt und schlummerten erschöpft. (P. 19)

Ⅳ 接続助詞「が」の場合 —— 9例

(一) 話の前おきを示す例

ⓐ 「ある劇場の地下喫茶室が山村英夫の目的の場所だったが、／

舗装路一ぱいに溢れて行き交う人々の肩や背に邪魔されて、狭い歩幅でのろのろと進むことしか出来ない。」 (P. 179)

Das Ziel Hideo Yamamuras war ein Café im Kellergeschoss eines Theaters.

(ひでお・やまむらの目的の場所はある劇場の地下喫茶室だった。)

Auf der von Menschen überfüllten Strasse konntesser sich nur

langsam und mit kleinen Schritten vorwärtsbewegen, da ihm Schultern und Rücken der Passanten den Weg versperrten. (P.1)

ⓐは「驟雨」の冒頭の一節である。「ある劇場の地下喫茶室」が主語、「山村英夫の目的の場所」が述語で、いわゆる「倒置」により、小説における語り手が話の前おきとして主語を印象づけている。独訳ではそうした倒置はなく、普通の語順に戻され、客観的な説明文として処理されている。

ⓑ 「地味な茶色な封筒を選んで、女の宛名を書きつけたが、／
そのときの彼女の名は、手紙を相手にとどけるための事務的な符号として直ぐ彼の脳裡から消え、／
女の姿態だけが色濃く残った。」 (P. 183)

Er wählte einen schlichten, hellbraunen Briefumschlag und schrieb die Adresse der Frau darauf.

Ihr Name diente zu dieser Zeit lediglich der Postzustellung und entschwand sofort seinem Gedächtnis ;
einzig ihr lebendiger Körper blieb ihm deutlich in Erinnerung. (P. 5)

ⓑは話の前おきと言うより、説明文の様相を呈している。

ⓒ 「女は彼の視線に気付き、軽く唇を噛むと下を向いて／
乱れた呼吸をととのえていたが、／
急に顔をあげると笑い声をたてた。」 (P. 189)

Sie bemerkte seinen Blick, biss sich leicht auf die Lippe und senkte die Augen.

Sie fasste sich und atmete wieder ruhiger ; dann blickte sie plötzlich auf und lachte laut. (P. 12)

この文は接続助詞「て」の項で一度扱ったが、「が」の項で再度登場させた。「乱れた呼吸をととのえていたが、」は、話の前おきとしてセンテンスを完全に独立させてしまうのには、後続の連文節「急に顔をあげると笑い声を立てた。」との間に、動作の関連性・連続性がありすぎる。そこで、セミコロン(;)とdannを使って、両センテンス間の間隙を埋めている。

（二） 逆接の確定条件を表わす例

ⓐ 「そこに愛情の鮮烈さもあるだろうが、／わずらわしさが倍になることとして／

（それから故意に身を避けているうちに、胸のときめくという感情は彼と疎遠なものになって行った。） （P. 180）

Darin liegt wohl auch die frische Kraft der Liebe.

Doch ihm schien es, als verdoppele sich mit der Liebe zugleich auch der Kummer. （P. 2）

「そこに愛情の鮮烈さもあるだろう」、（しかし、その反面）「わずらわしさが倍になることとして」の意で、「しかし、その反面」に対応する語としてDochが文の冒頭に出されている。

ⓑ 「女の顔を見詰めたまま話を聞いていた彼は、無表情を装って、『そう、それは結構だ』と答えたが、／

心の中では、『これでは、まるで求愛をして拒絶されたような按配だ』と呟いていた。」 （P. 184）

Während er ihr zuhörte, starrte er sie weiterhin an und antwortete dann mit unbewegtem Gesicht：„ So, wie schön.“

Aber bei sich dachte er：„ Das ist ja fast, als hätte ich ihr eine Liebeserklärung gemacht und wäre abgewiesen worden.” （P. 6）

ⓑ では文の冒頭にAber が使われている。

ⓒ 「従って、他の女たちからは『おねえさん』と呼ばれていたが、／

その女の口調には、そのためばかりでない好意が感じられた。」

（P. 192）

Deshalb wurde sie von den anderen Mädchen, „ ältere Schwester “ genannt.

Aber aus dem Ton des Mädchens hörte er einen Respekt

heraus, der nicht nur daher rühren mochte. (P. 15)

ⓒの独訳では、Aber が文の冒頭に使われているが、日本文を検討してみると、「従って、他の女たちからは『おねえさん』と呼ばれていたが、」の「が」が、果して逆接の確定条件として１００％断定できるかどうか、少々微妙である。幾分その中に、話の前おきとしての要素も認められないことはなく、この要素を独訳に盛り込むことは至難の業と言わねばなるまい。ⓓ, ⓔも同様であろう。

ⓓ 「店頭に佇んでいる女たちは彼の顔を見覚えて、誘いの声をかけることはなくなっていたが、／
目立って背の高い女が、傍を通り過ぎて店内へ入ってゆこうとする彼の耳もとで囁いた。」 (P. 191)

Die vor dem Bordell herumstehenden Frauen kannten ihn und richteten ihre lockenden Stimmen nicht mehr an ihn.

Eine auffallend grosse Frau jedoch flüsterte ihm, als er an ihr vorbei ins Bordell gehen wollte, ins Ohr: (P. 14)

ⓓの場合、「が」に相当する語 jedoch は、文中に用いられている。

ⓔ 「山村英夫は、この男と同じ範疇の語彙(ごい)で会話できるのは麻雀と娼婦についてだけだ、と考えていたが、／
数か月以前から娼婦についての話題は彼等の間から除かれた。」
(P. 199)

Hideo Yamamura wusste, dass ihn mit diesem Mann nichts ausser den Gesprächen über Mahjong und Dirnen verband.

Seit einigen Monaten aber war zwischen ihnen das Thema Dirnen ausgeklammert. (P. 22)

ⓔでは、「が」に相当する語 aber が文中に用いられている。

(三) 並立を示す例

ⓐ 「(女はすでに、かなりの額の貯金を持っているらしい。)

部屋の調度品も、よく選ばれたものを揃えていたし、／
いま骰子を転がしている机も紫檀であるが、／
このダイスの道具だけは粗末だった。」　（P. 193）

（Die Frau schien bereits ziemlich viel Geld gespart zu haben ;）

denn die Zimmereinrichtung bestand aus ausgewählten Stücken.

So war der Tisch, auf dem sie würfelten, aus rotem Sandelholz.

Nur das Würfelspiel war schäbig.　（P. 16）

「部屋の調度品も……ていたし」の「し」は並立を示す接続助詞で、「……机も紫檀であるが」の「が」も並立を示す接続助詞である。この「Aも…ていたし、Bも…であるが、Cだけは…だった。」の図式は、独訳には見出せない。わずかに、denn と So にその痕跡を認めるにすぎない。

V　動詞の連用形中止法の場合 ―― 7例

Vの場合、用法は千差万別で、類型的に分類することは不可能であるが、強いて類別すれば、次のようになる。

（一）場面または条件設定を示す例

ⓐ「煙草に火をつけ、／
ゆっくり煙を吐きながら部屋のなかを見廻している彼の眼に、小さな額縁のなかの女優の顔が映った。」　（P. 181）

Dort hatte er sich eine Zigarette angezündet.

Langsam stiess er den Rauch aus, währenddessen erblickten seine umherstreifenden Augen in einem kleinen Rahmen das Gesicht einer Schauspielerin.　（P. 3）

ⓐでは、「煙草に火をつけた。」という一つの場面を設定し、その場面における男のもう一つの動作を描写している、という解釈がなされているようである。

ⓑ 「彼は不安になり、／
そして不安になった自分に操(くすぐ)ったい気持を覚えた。」　（P. 189）

Ihm wurde seltsam zumute.
Gleichzeitig kam er sich lächerlich vor.　（P. 12）

ⓑでは、「彼は不安になった。」という条件設定をし、その条件に付随して起った心理の動きを追っている。

ⓒ 「十月も末に近づき、／
山村英夫のいる事務室の窓からは、鈴懸の街路樹がその葉群のてっぺんを、黄ばんだ色に変えてゆくのが見られた。」　（P. 199）

Der Oktober ging seinem Ende entgegen.
Vom Bürofenster aus, wo Hideo Yamamuras Arbeitsplatz war, konnte man sehen, wie sich die Spitzen der Platanen am Strassenrand gelblich verfärbten.　（P. 22）

「十月も末に近づいた。」は、場面とも条件設定とも取れる。連用形中止法の場合、冒頭の文節の持つ雰囲気が、後に続く文節に及んでいるわけだが、独立したセンテンスとして切り離しても、十分余韻は残るのであり、独訳においても同様であると思われる。

(二) 長いセンテンスを整理する例

ⓐ 「（鏡の中で、女は彼を見詰めて言った。）
『いつお帰りになるか、旅行先からお手紙をくださいませんか。宛名はね……』と、／
女はゆっくりした口調で、娼家の住所と自分の姓名を告げ、／
『わかりましたね、……ですよ』と、もう一度、彼の記憶に刻み込んでゆくように、一語一語念入りに繰返した。」　（P. 182）

（Die Frau beobachtete ihn im Spiegel und sagte dann：）
„Schreiben Sie mir doch bitte von unterwegs, wann Sie zurückkommen. Meine Adresse ist …“　（P. 4）

Sie sagte ihm langsam und deutlich die Adresse des Bordells und ihren eigenen Namen.

„Sie haben mich doch verstanden — nicht?“ fragte sie und wiederholte alles noch einmal sorgfältig Wort für Wort, damit es sich seinem Gedächtnis fest einpräge. (P. 5)

ⓑ 「このときの彼の眼には、道子が昔ながらの紅燈の巷に棲む女、大時代な運勢暦に一喜一憂する女として映り、／
その女の心を慮って彼は道子に良い星を願ったのであろうか。」
(P. 195)

Jetzt erblickte er in Michiko eine Frau aus dem Viertel der roten Laternen aus der guten alten Zeit, die einem altmodischen Horoskop auf Gedeih und Verderb ausgeliefert war.

Wünschte er dieser Frau deshalb einen glückbringenden Stern, weil ihm jetzt ihr Schicksal nicht mehr gleichgültig war? (P. 19)

ⓒ 「地味な茶色な封筒を選んで、女の宛名を書きつけたが、／
(「が」は既出)
そのときの彼女の名は、手紙を相手にとどけるための事務的な符号として直ぐ彼の脳裡から消え、／
女の姿態だけが色濃く残った。」 (P. 183)

Er wählte einen schlichten, hellbraunen Briefumschlag und schrieb die Adresse der Frau darauf.

Ihr Name diente zu dieser Zeit lediglich der Postzustellung und entschwand sofort seinem Gedächtnis;

einzig ihr lebendiger Körper blieb ihm deutlich in Erinnerung. (P. 5)

ⓒでは、「そのときの彼女の名は、……直ぐ彼の脳裡から消え、」を、独立し

たセンテンスとして切り離しているが、次のセンテンスとはセミコロン（；）で接続させている。セミコロンは、意味上コンマ（，）では近すぎるし、ピリオド（・）では離れすぎるという場合に使用するものである。ⓓも同様である。

ⓓ 「古田五郎は、ゆっくりした大きな動作で腕をうごかしてロイド眼鏡を外し、／ 水色の縞のはいったハンカチでレンズを拭きながら、凝っと上目使いで相手を見て、「ところで、（省略）」 （P. 200）

Gorō Furuta nahm betont langsam mit weit ausholender Geste seine Hornbrille ab ; während er mit einem hellblau gestreiften Taschentuch die Brillengläser putzte, musterte er ihn unverwandt von unten. „ Übrigens, ……/ “ （P. 23）

『 雨』では、所々にかなりの長文が見られる。果してこれだけ長々とセンテンスを書き連ねる必然性が常にあるのかどうか、疑問に思うのである。徒らに長たらしいセンテンスは複雑で、時には読み手に対し誤解を招く危険性があるのではないだろうか。

Ⅵ 断定の助動詞「だ」の連用形「で」の場合 —— 3例

Ⅵの3例はすべて「AはBだ。」、つまりA＝Bの図式にあてはまるものである。

ⓐ 「映画雑誌のグラビア頁から切り取られたらしいクローズ・アップで、／レンズを正面から凝視している北欧系の冷たい顔は、その一部分が縦に切り捨てられ、従って片方の眼は三分の一ほど削りとられている。」（P. 181）

Es war eine Nahaufnahme, wohl aus einem Filmmagazin ausgeschnitten.

In die Linse starrte, frontal aufgenommen, ein kühles nordeuropäisches Gesicht, von dem ein Teil der Länge nach abgeschnitten worden war, so dass von dem einen Auge etwa

ein Dr ttel fehlte.　（P. 3）

ⓐの場合、省略されている主語を補うと、「（それは）……クローズ・アップだった」ということになり、前おきとも説明とも両様に取ることができる。独訳では主語なしのセンテンスは成り立たない。

ⓑ 「『人間ポンプ』というのは、特殊な胃袋を観せものにして舞台に立っている男で、／
呑みこんだガソリンに点火して唇から火焔を吐いたり、幾枚も次々と胃の腑へ納めた剃刀の刃を重ね合せて口から取出したりするのである。」（P. 186）

Unter „ Menschenpumpe “ verstand sie einen Feuerschlucker, der mit einem besonders gearteten Magen auf der Bühne Kunststücke vorführt.

Zum Beispiel verschluckt er Benzin, um es angezündet als Flammen aus dem Mund zu blasen, oder er schluckt nacheinander Rasierklingen herunter, um sie anschliessend zusammengelegt wieder auszuspucken.（P. 9）

ⓑも、「『人間ポンプ』というのは、……男だ」、つまりA＝Bの図式であるが、独訳はやや趣きが違う —— Unter „ Menschenpumpe “ verstand sie einen Feuerschlucker.（「人間ポンプ」という名のもとに、彼女は Feuerschlucker《＝火焔を呑みこむ男》を理解していた。）加えて次のセンテンスの前には、Zum Beispiel（＝例えば）を補って訳している。

ⓒ 「四緑（しろく）木星、小衰運という星で、／
故障した自動車の下に仰向けに這い込んで修繕している男の絵が載っている。」　（P. 198）

Das Zeichen JUPITER deutete auf einen sinkenden Stern ; daneben fand sich das Bild eines Mannes, der unter einem beschädigten Auto lag und es reparierte.（P. 21）

ⓒでは、同様にA＝B、「（それは）四緑(しろく)木星、小衰運という星だ。」というふうになっている。独訳は、Das Zeichen JUPITER deutete auf einen sinkenden Stern；（ジュピターという印は、小衰運の星を示していた）となっており、セミコロンで次のセンテンスに接続させている。

Ⅶ まとめ

以上、実際の検証を進めて来たわけであるが、ここでもう一度整理してみたい。

＜接続助詞「て」の場合 ── 9例＞

(一) 上下の文節を軽く接続する例 ── （5例）

(二) 順接の確定条件を示す例 ── （2例）

(三) (一)と(二)の中間的用法としての例 ── （2例）

＜接続助詞「が」の場合 ── 9例＞

(一) 話の前おきを示す例 ── （3例）

(二) 逆接の確定条件を表わす例 ── （5例）

(三) 並立を示す例 ── （1例）

＜動詞の連用形中止法 ── 7例＞

(一) 場面または条件設定を示す例 ── （3例）

(二) 長いセンテンスを整理する例 ── （4例）

＜断定の助動詞「だ」の連用形「で」の場合 ── 3例＞ A＝Bの例

上記の結果を見ると、比較的意味･用法のはっきりしている例は、次の通りである。

- 接続助詞「て」の場合
  - (二) 順接の確定条件を示す例
- 接続助詞「が」の場合
  - (二) 逆接の確定条件を表わす例 ── ドイツ語では、Aber（文頭）2例；Doch（文頭），aber（文中），jedoch（文中）各1例
  - (三) 並立を示す例
- 動詞の連用形中止法
  - (一) 場面または条件設定を示す例

・断定の助動詞「だ」の連用形「で」の場合

「AはBだ」の例

上記以外の、接続助詞「て」・「が」や動詞の連用形中止法などは、意味・用法がかなり曖昧で、加えてドイツ語には上記のような品詞は全くないので、訳者が判断に苦しむ機会は多かったことであろう。

何故このような傾向が見られるかと言うに、谷崎によれば、「実に口語体の大いなる欠点(けつてん)は、表現法の自由に釣られて長たらしくなり放漫に陥り易(やす)いことでありまして、徒(いたず)らに言葉を積み重ねるためにかえって意味が酌み取りにくゝなりつゝある。」(谷崎施線)注6) と言うことになる。日本語が非論理的な言語であるという指摘は今までにもよくされてきたし、今回の検証結果からもある程度推測されるところであるが、さりとてその日本語の特質の上に安住していて良いというものでもない。最近日本語を学ぶ外国人も増加の一途をたどっている。今後日本語が国際社会に受け容れられるためには、こうした日本語の弱点は改善されなければならないだろう。

おわりに、今回の検証結果からすぐ一般的な決論を引き出すことは避けなければならない。『　雨』の全センテンス中10%程度の比率と分析内容が、果して他の作品にも共通するものなのか、作品の種類及び数量などの面でまだ十分とは言えず、単に一つの傾向をつかんだに過ぎない。これから更に多くの作品を検証し、様々な問題点を探りつつ、実証の裏付けをして行きたいと考えている。

—了—

注　1),6) 谷崎潤一郎著『文章読本』(旺文社文庫)

2)　吉行淳之介作『驟雨』　(角川文庫)

3)　Junnosuke Yoshiyuki : REGENSCHAUER
Übersetzt von Claudia u. Elart von Collani,
Jorinde Ebert, Yūko Furusawa und Kōzō Hirao
(同学社、1982)

4),5) 雑誌『基礎ドイツ語』三修社(1960年1月号〜4月号)
訳者:橋本文夫、大場国彦